



▲離座敷(秋庭の間) 戸定邸落成から2年ほど後に、昭武の生母・秋庭のために増築された。丸窓の下の材料など、奥座敷より良い物が使われており凝った意匠になっている。



▲表座敷 中の間から奥座敷を見る それぞれの部屋から庭が眺められ風景が見やすいように柱や建具の位置が計算されている。



▲表座敷 客間・二の間全景 昭武は、皇太子時代の太正天皇や徳川慶喜も戸定邸に迎えている。64枚の畳が使われており、庭に面している部分の軒桁は、つなぎ目のない1本の木材でできている。



▲使用者の間 玄関横にある従者が使った部屋。欄間には福を招くコマモリの紋様があしらわれている。



▲湯殿 浴槽は、昭和初期のものと考えられる。洗い場が広く天井も網代編みの意匠の質沢な造りとなっている。



▲奥座敷(八重の間) 後妻の八重が使用した。昭武の寝所としても使われた。

成した戸定邸に、昭武は生活の拠点を移した。明治天皇に仕える麿香間祇候として、定期的に皇居に赴く時などに利用した都内の水戸徳川家本邸との行き来にも、かつて江戸と水戸を結んだ水戸街道の宿場町であった松戸は都合の良い立地であった。

戸定邸は木造の平屋で一部2階建てになっている純和風の建物で、9棟が廊下で結ばれ、23の部屋がある。建物内は、来客用の「表」と、家族と使用人用の「奥」に明確に区分され、その空間で過ごす人のことを考えて設計されている。シンプルの中に非常に凝った部分がある。シンプルの中に非常に凝った部分がある。シンプルの中に非常に凝った部分がある。

昭武はこの美しい自然との一体感の中で、親しい人々を招いて時には写真や狩猟、陶芸などの趣味に興じ、充実した人生の時間を重ねたのだらう。彼がよく座っていたという客間の一角に腰を下ろすと、言いようのない心地良さに包まれていくのを感じた。どんな時も人間関係を大切に、共に過ごす時間を楽しんだ昭武。彼は自分が置かれた立場を理解し、求められることを精一杯実行し、その中で自分のやりたいことを叶えていく能力があった。そして、人



▲昭武が好んだ富士を望む場所 庭の西側のアオギリの木立は絶妙な間隔が空いており、客間の床柱の前あたりに座り富士山を眺めると、アオギリが額縁のようになり美しい。



▲庭園 洋風技法による芝生面は、日本に現存する最古のもの。東から南に連なるコウヤマキ。4本の木は昭武が遊びの地に運ばせたもの。和と洋が融合した、昭武の美学が大きく生かされた庭である。

**松戸市「戸定邸」「戸定歴史館」**

入館時間 9時30分～16時30分 休館日 月曜日(祝日の場合は翌平日)

料金 一般320円(戸定邸・歴史館) 250円(戸定邸) 150円(歴史館)

高校・大学生160円(戸定邸・歴史館) 100円(戸定邸) 100円(歴史館)

※中学生以下無料(その他団体割引あり)

お問い合わせ 戸定歴史館 ☎047-362-2050

戸定歴史館では、戸定邸に住んだ「徳川昭武」をモチーフにした開館30周年記念ミュージアムグッズをはじめ、図録「プリンス・トクガワ」やマスクコードなど、様々なグッズを販売しています。通信販売も行っていますので、ぜひご利用ください。





▲外庭にある復元された東屋。 Drone movie 戸定邸をドローンムービーで見てみよう!▶

に好かれる魅力的な人物だった。春夏秋冬、美しい自然の彩りに包まれ、戸定邸は徳川家の遺風を今に伝えている。

昭武は人生の折々で、人との出会いとその縁を大切にしました。そして少年期と青年期の2度にわたる西欧での体験は、彼の豊かな感性と人間性を培ったと言える。和と洋が混在し、美しく調和した戸定邸と庭園がそれを物語っている。

人との縁、西欧の文化 昭武の感性が育まれていった 廃藩置県後、陸軍少尉となっていた昭武は、明治9(1876)年にフィラデルフィア万国博覧会の御用掛として渡米した。海外経験を評価されての派遣とも言えるが、要職ではなかった。その後、昭武は2度目のパリ留学をしていく。彼は学ぶことを諦めていなかったのだ。そこで再会したヴィレットとは、その後も文通をしながら心を通わせ、年齢・国・身分などの違いを超えて、ヴィレットが亡くなるまで交流を続けた。帰国後、昭武は天皇に近侍し、定期的に拝謁を賜る麿香間祇候となった。そして明治16(1883)年、水戸徳川家の家督を甥の篤敬に譲ると、昭武は29歳で隠居したのである。